

平和の祭壇とアウグストゥスの家系

文学研究科歴史学専攻博士前期課程一年

池田遼一

はじめに

永遠の都といわれるローマには数多くの建築物がある。コロッセウムやパンテオン等と今でも色褪せないものばかりである。今回のテーマとして挙げる建築物は紀元前13年に建設が決議され、紀元前9年に竣工している「アウグストゥスの平和の祭壇」である。この祭壇に関しては研究者によって意見が異なっている。本稿では、この「アウグストゥスの平和の祭壇」の外側に描かれている計六枚のパネルから、特に、南側に描かれているアウグストゥス一族の行進行列のパネルを中心に彼の家系の特徴を考察し、今後の研究課題を明らかにしていきたい。

「アウグストゥスの平和の祭壇」について

この祭壇は、アウグストゥスのガリアやヒスパニアの平定完了を記念して元老院が彼に捧げたものである。紀元前13年当時はローマから北へ向かうフラミニウス街道が、ティベレ川に向かつて直線に

走る途中に建てられている。現在でも祭壇を見ることは可能であるが、当時とは建っている場所が異なる。1936年、ときの独裁者であつたムッソリーニの考へでアウグストゥスの靈廟の周辺を再開発した際に、靈廟とティベレ川にはさまれた地に移動された。

この祭壇の構成としては、高さ6メートル、幅116センチメートル、長さ106センチメートルの白大理石の壁に囲まれた中に小さな祭壇があるという造りになつていて。今回のテーマであるアウグストゥスの家系を考える際には、外側の計六枚のパネルの方が重要となるので、こちらを取り上げたい。

①東側と西側の四枚のパネル

東側の左パネルには大地の女神テツルスが、右パネルには女神ローマが彫られている。東側の二枚のパネルに登場しているのは、全てが神もしくは擬人神であり、明らかに神々の時代の表現と考えられる。一方、西側にも同じようなパネルが二枚はめ込まれている。左パネルには建国の王であるロムルスとレムスが、右パネルにはトロイア戦争の英雄アエネアスが彫られている。西側の二枚のパネルに登場しているのは、伝承上の人間、つまり現実の人間と神の中間に位置する英雄を描いている英雄時代であると考えられる。以上四枚のパネルは、アウグストゥスの治世がもたらした平和に関する公式宣言の、言葉ではなく、形による表現といえる。

②南側と北側の二枚のパネル

南側と北側のパネルには共に人物の行進行列のパネルが彫られていて。南側にはアウグストゥス一族や聖職者たちの行進行列が、北

側には元老院議員たちの行進行列となっている。ここではアウグストゥスの家系に関係する南側のパネルに注目したい。このパネルは四つのグループに分かれており、先頭から、大神祇官団、ト島官団、神官団、そしてアウグストゥス一族が続く配置となっている。一族ではアウグストゥスをはじめとするユリウス氏カエサル家、妻リウィアをはじめとするクラウディウス氏ネロ家がそれぞれ描かれている。ユリウス氏からはアグリッパは確実に認識することができるのだが、娘のユリアや息子であるガイウスやルキウスに関しては研究者によつて意見が異なつてゐる。

おわりに

時代がまさにローマ社会における大変動期であり、その中でローマ社会の基本的な構成要素であつた家族の形態、親族集団の構造が大きく変容していきことである。もう一つは、アウグストゥスの下で誕生した帝政が重大な課題を抱えていたことである。主な課題としては、新しい支配体制政治的安定性と継続性の問題であった。具体的な政権を支える人材を如何にして確保し、皇帝の後継者をどのように選ぶかということであった。

「アウグストゥスの家系」について

平和の祭壇の南側に描かれているアウグストゥス一族の行進行列は、彼の家系を彫刻として描いたものである。アウグストゥス一族は主に二つの家系を中心にして構成されている。アウグストゥスを中心としたユリウス氏とリウィアと中心としたクラウディウス氏である。アウグストゥスの家系をドムス・アウグスタともいう。ドムスとはファミリアの言い換えの表現でもあるとされ、もともとは建築物を表わす言葉であつたのだが共和政末期頃から最小の家族を指す言葉に変わつてゐる。

このドムス・アウグスタの成立には、二つの歴史的な要因が影響していると考えられる。一つは、共和政末期から帝政成立期といふ

以上今回の報告では、アウグストゥスの平和の祭壇と彼の家系を簡単に取り上げた。アウグストゥスの平和の祭壇に関しては、特に南側の一族の行進行列が家系との関係上重要として考へてゐる。しかし、行列に参加している人物の特定においては研究者によつてそれぞれの意見があり、特定することは困難であると思われる。

今後の課題としては、平和の祭壇を中心にはなく、アウグストゥスの社会政策を中心に、この平和の祭壇は社会政策の一環として考察していきたい。政治面と軍事面を主な柱として、さらにはアウグストゥスの家系を絡めて見ていきたい。そこから「アウグストゥスの平和」とはいかなるものだったのかを明らかにしていきたい。

〈参考文献〉

- ・ストニウス著 国原声也助訳「ローマ皇帝（上）」筑波文庫 1986年
- ・ルール・クリマル著 北野徹訳「アウグストゥスの世纪」文庫クセッハ
2004年
- ・青柳正規「皇帝たちのローマー都市に刻まれた権力者像」中公新書
1992年
- ・島田誠「古代ローマの市民社会」世界史リブレット3 山川出版社
1997年
- ・島田誠「ヌマス・アウグストゥスと成立期ローマ帝政」「西洋史研究」2004年
pp.24-48.
- ・広瀬川矢子「トーハ=ベキス=アウグスタ」『ヘンリート・アウグストゥ
スの統治政策への関連』『西洋史学』1986年pp.35-51.
- ・橋本博謙「古代ローマの親族集団—familia・domusを中心とした—」「國立古
典学研究所」1992年pp.68-77.
- ・Simon,E.Ara Pacis Augustae, New York Graphic Society Ltd. 1976.
- ・Wayne Anderson,The Ara Pacis of Augustus and Mussolini, Editions
Fabriart Ltd. 2003.
- ・Zanker, Paul, The Power of Images in the Age of Augustus, University
of Michigan 1998.